

SigmaSystemCenter 連携スクリプト Ver12.3 インストールガイド

(このページは空白です)

はじめに

このインストールガイドでは、SigmaSystemCenter 連携スクリプト（以下、SSC 連携スクリプト）のインストール、環境設定、使用方法に関して説明しています。


備考

1. 本製品は、以下の OS が動作する Express5800/100 シリーズ、ft サーバに対応しています。
 - Windows Server 2012
 - Windows Server 2012 R2
 - Windows Server 2016
 - Windows Server 2019
2. 本書は、以下のプログラムプロダクト・バージョンに対応しています。
 - WebSAM iStorageManager Ver12.3 以降
 - WebSAM Storage PerforNavi Ver12.3 以降
 - WebSAM SigmaSystemCenter 3.7 に修正モジュール SSC0307-0001 が適用されているバージョン以降
3. 本文中の以下の記述は、特に明示しない限り、対応する製品名を意味します。

本文中の記述	対応する製品名
iStorageManager	WebSAM iStorageManager
PerforMate	WebSAM Storage PerforMate
PerforNavi	WebSAM Storage PerforNavi
SigmaSystemCenter または SSC	WebSAM SigmaSystemCenter

4. 商標および登録商標
 - Microsoft, Windows, Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の、米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - その他、記載されている製品名、会社名等は各社の登録商標または商標です。
5. 各画面の入力、パス名、コマンドパラメータは、JIS90 の文字セットの範囲で指定してください。

6. 本文中は、特にご注意いただく内容を以下で示しております。内容については必ずお守りください。
この表示を無視して誤った取り扱いをすると、システム運用において影響がある場合があります。

表示の種類	
種 類	内 容
	操作において特に注意が必要な内容を説明しています。

2014 年 10 月 初 版

2021 年 4 月 第 7 版

目 次

第 1 章 導入	1
1.1 動作環境	1
1.2 インストール・アンインストール	2
1.2.1 インストール	2
1.2.2 アンインストール	3
1.2.3 アップデート	4
1.3 環境設定	5
第 2 章 運用準備	7
2.1 PerforMate の設定	7
2.2 PerforNavi の設定	7
付録 パスワードの暗号化	8

(このページは空白です)

第 1 章 導入

1.1 動作環境

ハードウェア	Express5800/100 シリーズ、ft サーバ
OS	Windows Server 2012 Datacenter (※1) (※2) Windows Server 2012 Standard (※1) (※2) Windows Server 2012 R2 Datacenter (※1) (※2) Windows Server 2012 R2 Standard (※1) (※2) Windows Server 2016 Datacenter (※1) (※2) Windows Server 2016 Standard (※1) (※2) Windows Server 2019 Datacenter (※1) (※2) Windows Server 2019 Standard (※1) (※2) (※1) Hyper-V 機能未搭載の製品もサポートします。 (※2) Server Core インストールオプションおよび Minimal Server Interface のインストールオプションはサポートしていません。
ソフトウェア	WebSAM SigmaSystemCenter 3.7に修正モジュールSSC0307-0001が適用されているバージョン以降 WebSAM iStorageManager Ver12.3以降 WebSAM Storage PerforMate
メモリ	OS 必要メモリ + 15MB 以上
ディスク容量	プログラム容量 : 2MB 以上 動作必要容量 : 230MB 以上 (※3) ※3 iStorageManager の管理サーバから一時的にダウンロードするファイル容量も含まれます。

※上記は、本バージョンの製品の初期出荷時点でサポートする動作環境です。

1.2 インストール・アンインストール

1.2.1 インストール

以下の手順にしたがって、SSC 連携スクリプトをインストールします。インストールの実行はシステム管理者で行う必要があります。

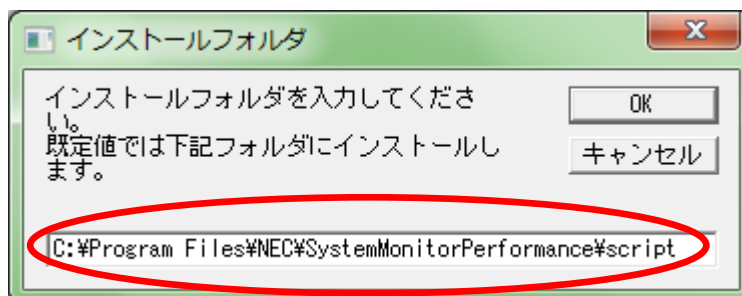
- (1) iStorageManager のインストール媒体に含まれる以下のファイルを、ローカルディスクにコピーします。
DVD ドライブ:¥SSCSCRIPT¥WINDOWS¥SETUP.ZIP
- (2) コピーした ZIP ファイルを任意の場所に解凍します。
- (3) 管理者権限でコマンドプロンプトを実行し、ZIP ファイルの解凍先の SETUP フォルダ配下に移動します。
- (4) コマンドプロンプト画面から、SETUP フォルダ配下に存在する install.vbs を実行します。
- (5) 画面の指示に従いインストールを行います。



install.vbs をダブルクリックで実行すると、ファイルがコピーされず、インストールに失敗する場合があります。



SSC 連携スクリプトのインストールにあたっては、スクリプトを導入するサーバに、事前に SigmaSystemCenter をインストールしている必要があります。SigmaSystemCenter がインストール済みの場合、インストール途中でインストールフォルダの選択画面で以下の例のように既定値のフォルダ名が表示されます。既定値が表示されない場合は、SigmaSystemCenter のインストールを確認してください。



また、接続先の iStorageManager サーバが管理する M シリーズのストレージについては、PerforMate が導入されている必要があります。

1.2.2 アンインストール

以下の手順にしたがって、SSC 連携スクリプトをアンインストールします。アンインストールの実行はシステム管理者で行う必要があります。事前に SystemMonitor 性能監視の設定で収集が行われていないことを確認してください。

- (1) 1.2.1 インストールの (1) ~ (2) の手順を実行します。
- (2) 管理者権限でコマンドプロンプトを実行し、ZIP ファイルの解凍先の SETUP¥Uninstall フォルダ配下に移動します。
- (3) コマンドプロンプト画面から、SETUP¥Uninstall フォルダ配下に存在する uninstall.vbs を実行します。
- (4) 画面の指示に従いアンインストールを行います。

アンインストール時に「設定情報も削除しますか？」というダイアログが表示された場合、「はい」を選択すると、インストール時に設定した情報も削除します。

OS 再インストール後に SSC 連携スクリプトを再インストールする場合などで前回運用時の設定を引き継ぎたい場合は、上記のファイル (SSC 連携スクリプトのインストールフォルダ配下の GetiStorageLDPerforData.dat ファイル) を事前にバックアップし、SSC 連携スクリプト再インストール後にリストアしてください。



uninstall.vbs をダブルクリックで実行すると、ファイルが削除されず、アンインストールに失敗する場合があります。

1.2.3 アップデート

SSC 連携スクリプトのアップデートをする場合は、ソフトウェアのアンインストールを行ってからインストールを行います。

手順は「1.2.1 インストール」、「1.2.2 アンインストール」を参照してください。

1.3 環境設定

スクリプトのインストール場所を変更せずに、スクリプトが接続する **iStorageManager** の管理サーバの情報や接続インターバルを変更したい場合はアンインストール後に、**install.vbs** を再実行するか、SSC 連携スクリプトのインストールフォルダに格納される **GetiStorageLDPerforData.dat** を直接編集することで設定変更が可能です。詳細は下記を参照してください。設定を変更する場合は、事前に **SystemMonitor** 性能監視の設定で収集が行われていないことを確認してください。

GetiStorageLDPerforData.dat ファイルの例

```
Version=12.3.001
Intval=1
IpAddr=192.168.0.10
PortNo=8070
UserId=iSM3
Passwd=CGGKCMDCEACBGBCL
```

(1 行目) Version=12.3.001

スクリプトのバージョン情報を示します。この行は編集しないでください。

(2 行目) Intval=1

スクリプトの実行間隔（インターバル[分]）の初期値を示します。この行は編集不要です。



SigmaSystemCenter からスクリプトが実行される際は、SigmaSystemCenter で設定している iStorage 情報の収集間隔がスクリプトに指定されます。そのため、SigmaSystemCenter の iStorage 情報の収集間隔を変更しても、この行の変更は不要です。

(3 行目) IpAddr=192.168.0.10

接続対象の iStorageManager の IP アドレスを指定します。指定方法は IPv4 形式の他、hostname.domain の形式でも指定することが可能です。

(4 行目) PortNo=8070

接続対象の iStorageManager に接続するためのポート番号を指定します。既定値では 8070 ですが、接続先の iStorageManager の設定に従って編集してください。

(5 行目) UserID=iSM3

接続対象の iStotageManager に登録済みの利用者を指定します。

(6 行目) Passwd= CGGKCMDCEACBGBCL

接続対象の iStotageManager に登録済みの利用者名に対応するパスワードを指定します。パスワードはそのまま書くことも可能ですが、セキュリティのため暗号化された値を指定することを推奨します。なお、暗号化には、インストーラに含まれる iSMcipherpw を利用します。iSMcipherpw の利用方法については、付録を参照してください。

第 2 章 運用準備

SigmaSystemCenter がインストール済みであれば、SSC 連携スクリプトとしてはインストール完了により運用準備は整っていますので、他に設定は不要です。

SigmaSystemCenter と PerforMate、PerforNavi を連携させるためには各製品で別途設定が必要になります。以下に PerforMate、PerforNavi で必要な設定を記載します。

2.1 PerforMate の設定

SigmaSystemCenter が論理ディスクの性能データ収集を行うためには、PerforMate の設定を行う必要があります。iSM サーバをインストールした後、iSM サーバの環境設定で以下の設定を行ってください。

- ・ iSM サーバを導入している環境が Windows の場合

[性能監視]・[他機能と連携] : 「する」を選択

- ・ iSM サーバを導入している環境が Linux、HP-UX の場合

[performance]セクション : 「performance_cooperation = yes」を記載

iSM サーバの環境設定に関する詳細は、iStorageManager のインストール媒体に同梱されている「WebSAM iStorageManager インストールガイド」を参照してください。

2.2 PerforNavi の設定

SigmaSystemCenter の Web コンソールで表示される論理ディスクの性能状況のグラフから PerforNavi を起動できるようにするためには、PerforNavi の設定を行う必要があります。PerforNavi をインストールした後、SigmaSystemCenter の Web コンソールでグラフを表示するディスクアレイに対して「統計情報の更新」の設定を行ってください。

上記の設定に関する詳細は、PerforNavi のインストール媒体に同梱されるマニュアル「iStorage ソフトウェア性能分析機能利用の手引」を参照してください。

付録 パスワードの暗号化

定義ファイルに記載するパスワードは、インストーラによるインストール時には自動的に暗号化を行い登録します。手動で接続先の `iStorageManager` の設定を変える場合は、パスワードを暗号化したうえで定義ファイルに記載することを推奨します。パスワードの暗号化を行うためには、`SETUP.ZIP` に含まれる以下のファイルが必要となります。

`¥SETUP¥files¥iSMcipherpw.exe`

ここでは、暗号化を行うための手順について記載します。

【書式】

`iSMcipherpw` 暗号化したいパスワード

【結果】

標準出力に、暗号化されたパスワードを表示します。この値を定義ファイルに記載してください。

【実行例】

パスワード“abc123”を暗号化します。

`C:¥SETUP¥FILES>iSMcipherpw abc123`

Accepted password is abc123.

Return value is CGGKCMDCBDBHBMC@CFCL.

Return Value の「CGGKCMDCBDBHBMC@CFCL」を `Passwd=` の行に転記してください。

※出力行の 2 行目、最後の「.」（ピリオド）は、暗号化されたパスワードには含みません。